

2022 (令和4) 年度 公立鳥取環境大学 SDGs 事業実績

2023 年 3 月

TUES Activities for SDGs

Tottori University of Environmental Studies

Sustainable Development Goals



< 目次 >

1. 教育	1
(1) 授業等含めた SDGs 教育の推進	1
2. 研究	4
(1) 外部及び学内競争的資金等獲得による SDGs 研究の推進	4
3. 地域貢献・地域連携	5
(1) SDGs 達成に向けた学生等の地域連携活動支援	5
(2) SDGs 推進のための行政、経済団体、企業、NPO 等との連携	6
(3) 地域住民向けの SDGs の情報提供及び地域住民と教員及び学生等が議論を行う場の提供	14
4. 広報活動・情報発信	19
(1) 本学 Web サイト、大学案内等で本学の SDGs の取組や学生等活動を掲載	19
(2) 本学主催 SDGs イベントの広報物（チラシ等）へ SDGs のロゴ、アイコンを使用	20
(3) 学生等の SDGs への関心を高めるための積極的な情報発信	20
5. 大学運営等	20
(1) EMS と SDGs とを関連付けし、PDCA サイクルを活用することによる目標の達成	20
(2) 多様な学生支援を行うことにより「誰一人取り残さない」ように努める	20
(3) 教職員等に対する SDGs 啓発、研修等の実施	21



本学は、創立以来目指してきた「持続可能な社会の実現」のため SDGs に取り組んでいきます。

1. 教育

(1) 授業等含めた SDGs 教育の推進

SDGs を知り SDGs の達成に向けた取り組みを多角的に考えることを目的として人間形成科目「SDGs 基礎」を継続して開設した。

シラバスに SDGs17 の目標との関連表を継続して掲載し授業内容の充実に努めた。



「麒麟の知」で「麒麟のまち」の取組紹介（2022年6、7月）

「麒麟の知」は、麒麟地域（鳥取市、八頭町、智頭町、若桜町、岩美町、兵庫県香美町、新温泉町）を中心とする鳥取の課題や在来知に関する知識を深化させるもの。そのため、鳥取に係る具体的かつ実践的な取組事例に触れることにより、地域課題の発掘能力と専門的知識を活用した解決能力を高めることを到達目標としている。全15回の授業のうちの3回は鳥取市用瀬町、智頭町、麒麟獅子舞とテーマを設定し、それぞれの行政担当者とともに地域で活躍されている方々を招き、実践的見地からの取組を紹介した。



チャットを活用した双方向のキャリア教育リモート講義を実施（2022年7月）

キャリアデザインB（2年生担当科目）では、ソフトバンク（株）によるリモート講義を実施した。本学では低学年から「働く」ということに理解を深めるためキャリアデザイン科目を開講している。講義では、まず、同社CSR本部中四国・九州地域CSR部の高際均 担当部長が「情報革命で人々を幸せに」をテーマに、デジタルトランスフォーメーションによる社会・産業構築の先進的な取り組みについて話を行った。次に、同社CSR本部地域CSR部多様性推進課の横溝知美氏が「企画の仕事とは」「就活の時の話」「働き始めてから今まで」等の働くことについてやソフトバンクのダイバーシティへの取り組みとして、多様な働き方について話を行った。



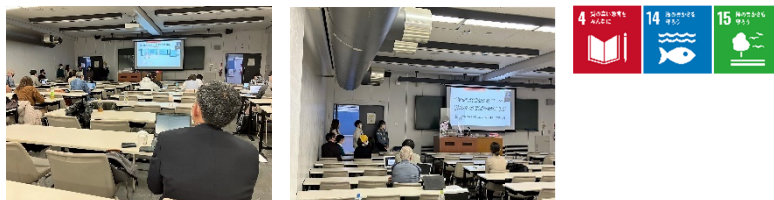
中央大学との共同フィールドワーク（サマースクール）の実施（2022年8月）

本学と中央大学は、連携協力協定に基づく交流事業として、両大学の学生が参加する共同フィールドワークを鳥取で実施した。土壌学・生物地球化学を専門分野とする環境学部 角野貴信 准教授が指導教員を務め「鳥取砂丘をさかのぼろう～豊かな流域環境をどのように維持するか～」をテーマに行った。全ての日程で、学生は2つの班に分かれ、鳥取砂丘や千代川上流域（芦津溪谷）におけるフィールドワークを通じて、両者の自然環境の差異を多面的に理解し、それらの自然環境をどのように維持することが、流域環境の「豊かさ」につながるのかを考察した。



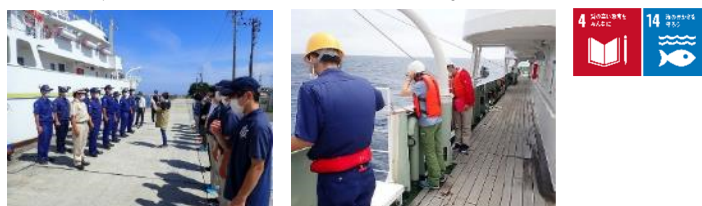
中央大学期末成果報告会で共同フィールドワークの学修成果発表（2022年12月）

8月に実施した共同フィールドワークに参加した本学と中央大学の学生が、中央大学多摩キャンパスで開催された中央大学FLP環境・社会・ガバナンスプログラム期末成果報告会においてフィールドワークの学修成果を発表した。フィールドワーク以降、フィールドワークに参加した学生は、2つの班に分かれ、担当教員である本学の環境学部 角野貴信 准教授の指導のもと、互いに意識し高め合いながら検討を重ね発表資料をまとめた。報告会当日、それぞれの班が約20分程度、発表資料に基づきフィールドワークでの活動報告とともに、その活動で得られた知見等を紹介した。



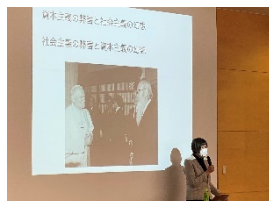
境港総合技術高等学校の実習船で海洋観測実習実施（2022年9月）

環境学部、経営学部の1、2年生が、境港総合技術高等学校の実習船「若鳥丸」に同校の生徒と共に乗船し、環境学部の太田太郎 准教授の指導のもとで海洋観測実習を行った。日中（朝6:00から日没まで）は美保湾から隠岐諸島周辺の海域で計測装置（CTD）による水深別の水温、塩分測定その他、潮流や気象情報の収集等の実習を行った。夜は漁労（釣り）実習で、アジを大量に釣り上げた。夜のミーティングでは、高校生からは実習船による航海実習の取り組みについて、本学の学生からは大学生活や入試対策等について発表し、お互いに意見交換を行った。



宇沢国際学館代表取締役による「SDGs基礎」特別講義（2022年12月）

宇沢国際学館代表取締役で内科医 占部まり 氏による「SDGs基礎」特別講義「SDGsと社会的共通資本を考える」を実施した。占部氏は、鳥取県米子市出身のノーベル経済学賞に最も近いと称された経済学者の故・宇沢弘文氏の長女で、宇沢氏が提唱した社会的共通資本と地域医療の課題に関する研究・講演活動をしている。講義のなかで、持続可能な開発目標（SDGs）と関連づけながら社会的共通資本とは何かを説明した。



TUES 放送文化部がNHK 全国大学放送コンテストで奨励賞を受賞（2023 年 1 月）

TUES 放送文化部は第 39 回 NHK 全国大学放送コンテストの映像 CM (communication message) 部門に「人類が残した『跡』」というタイトルの作品で参加し決勝（上位 8 作品）に進出した。惜しくも入賞は逃し奨励賞を受賞。この作品は視聴者に「身近にある環境問題に対し行動する重要性」を届けたいという思いで作られたもの。同部では映像番組部門にも「こちら、公立鳥取環境大学ヤギ部です！」という作品で参加し、準決勝まで進出した。この作品は本学の名物サークルの代表でもあるヤギ部の創設経緯、知られざる日常等が描かれている。



経営学部 兪ゼミが九州でフィールドワークを実施（2023 年 2 月）

経営学部の兪ゼミ生が九州フィールドワークを実施し、企業 2 社を訪問した。1 社目は、ソケットやスイッチ等の電気機械器具の生産を行っている大分県別府市にあるオムロン太陽（株）を訪問。同社では、従業員が改善の提案を積極的に行えたり、作業が簡素化されたり等、従業員が働き易い環境づくりが行われている。2 社目は、福岡県北九州市にある日産自動車九州（株）の工場を見学。溶接・組立・検査、部品の運搬等、人とロボットが協働する生産プロセスが、同社の品質の高さを維持している。



副専攻制度

本年度から副専攻制度を採用。「環境学」「経営学」の他に、必要な情報を活用する力を育成する「AI・数理・データサイエンス」、国際社会で必要となる英語力を養成する「英語実践」、鳥取に密着し在来知を学ぶ「地域実践」といった 5 つの副専攻を体系的に学べる。主専攻とは別に、興味のある分野を学び、境界を超えた発想力を養う。

種別	名称	概要
分野別副専攻	環境学	経営学部生を対象に、主専攻と並行して環境と人間の関係や環境に関する法令などの基礎的な理解を深め、環境問題の全体像を把握し、主専攻に活かすことのできる知識を身に付けることを目標とする。学部共通科目に加え、自然環境保全、循環型社会形成、人間環境の各分野の専門科目の一部を学ぶことで、環境学の中核的な内容を学ぶことができる。
	経営学	環境学部生を対象に、主専攻と並行して企業等の組織や地域における経営の様々な課題に挑戦し、その解決について具体的に提案・実行するための基礎力を身に付けることを目標とする。経営学の初学者が体系的に学ぶ基礎となる内容を経営学部の学生と同等の水準で学ぶことができる。
	AI・数理・データサイエンス	主専攻の知識に加え、昨今の社会で要請されている AI (人工知能)、数理科学、データサイエンスについての基礎的な知識も備えた人材の育成を目標とする。AI 技術とデータサイエンスを理解することで、それぞれの主専攻の分野で膨大なデータをより有効且つ効率的に活用できる能力を養い、さらに基礎となる数理を理解するこ

		とで、新たな技法及び技術を自分の力で修得していく能力も養う。加修は、AI・数理・データインズの基礎を学ぶための効果的な教育課程を編成している。
課題別副専攻	英語実践	英語運用能力を高め、様々な話題について複雑な文章の主要な内容を理解し、国際共通語として英語を用いる人々と不自由なくコミュニケーションができ、幅広いテーマについて明確で詳細な文章を作成できるようになることを最終的な目標とする。英語運用能力を養成する英語応用科目、英語発展科目、実際に英語が使えることを確認・実感する英語実践科目があり、段階的に英語力向上を目指す。また、英語力を客観的に証明する外部資格試験に向けた学修支援科目もある。
	地域実践(麒麟)	地域独自の「在来知」を深く学び、体験する中で課題を発見し、大学で普遍的な「専門知」をうまく運用し、地域社会の現実的な課題に実践的に対処する力を身に付ける。また、「主体性」や「判断力」、他者を受け入れ問題解決に導く「多様性」や「表現力」、「協働性」等も身に付けるために、演習や地域連携活動等を行い、地域の課題に積極的に関わるリーダーシップを持つ人材育成を目標とする。麒麟基礎科目群、演習科目群、地域志向科目群の3つの科目群がある。



2. 研究

(1) 外部及び学内競争的資金等獲得によるSDGs研究の推進

学内特別研究費助成採択研究

2022年度学内特別研究費に採択(20件)された研究課題とSDGsとの関連性を整理した。そのなかでSDGsとの関連性が高い(SDGs特別研究助成区分)7件の研究の研究者がサステナビリティ研究所の研究員として研究を行った。

No.	研究員		
	所属	氏名	職名
(1)	環境学部	浅川滋男	教授
(2)		加藤禎久	准教授
(3)		太田太郎	
(4)		重田祥範	
(5)	経営学部	島田善道	講師
(6)	谷口謙次		
(7)	人間形成教育センター	佐川龍之	准教授



砂にもぐるサンゴの一生 ~ タマサンゴのライフサイクルを世界ではじめて解明 ~ (2022年6月)
 環境学部 徳田悠希 准教授の共同研究成果により、沖合の砂泥底に住むタマサンゴにおいて、これまで謎だったその一生(ライフサイクル)を明らかにした。タマサンゴは玉のような丸い形で砂に潜るが、その子ども時代は海底に転がる貝殻片等に付着して暮らし、砂にも潜らないことがわかった。砂に潜るタマサンゴは固着性のタマサンゴが無性生殖による自切で形成していた。これまで手付かずだった沖合の海底に住むサンゴ類の生態解明や保全につながる重要な一歩となった。本研究は、科学研究費補助金(18K13649, 20K04147, B18H03366A, 21K14032)、学内特別研究費のサポートにより実施した。



環境経営研究科と環境学部の学生が廃棄物資源循環学会中国・四国支部の奨励賞をダブル受賞(2023年3月)

環境経営研究科環境学専攻1年生(環境学部 金相烈 教授のゼミ生)と環境学部4年生(門木秀幸 准教授のゼミ生)が、廃棄物資源循環学会にて研究発表を行い、それぞれ同学会中国・四国支部の奨励賞を受賞した。

- ・発表名：おから飼料の地域循環によるコスト及び環境負荷の推定 ~鳥取県を対象として~
- ・発表名：一般廃棄物処理施設の用地選定における候補地の評価方法



3. 地域貢献・地域連携

(1) SDGs 達成に向けた学生等の地域連携活動支援

まちなかキャンパス相談会を開催(2022年4月)

まちなかキャンパスで、主に1、2年生を対象にした地域連携活動に関する相談会を行った。コロナ禍でサークル活動や課外活動が制限されるなか、学生の地域での活動を活発にするとともに、まちなかキャンパスの利用を増やそうと、学生スタッフの発案により生まれた企画。地域連携活動の紹介、地域団体からの情報提供、利用できる助成金制度(SDGs 活動推進助成制度、地域連携活動推進助成制度)の紹介等、学生スタッフが対応した。



SDGs 活動推進助成

SDGs 活動を通して、持続可能な社会の実現を目指す意欲のある学生、大学院生(個人あるいは団体)を経済的に支援する。令和4年度は、5件を助成対象として採択した。

No.	活動名称
(1)	地球環境を考える会 公開勉強会考えよう!イロ!パ!の生産と課題!
(2)	人生会議をしてみませんか?
(3)	ジェンダーは本当に平等? 『生理の貧困』について考えよう!
(4)	拾って変える life
(5)	地域で作る循環型社会形成環境教育

地域連携活動推進助成

地域イベント等への参加、地域住民との交流等の活動を行う学生団体等への経済的支援により、地域連携活動を推進する。令和4年度は、2件を助成対象として採択した。

No.	活動名称
(1)	宇宙こども教室
(2)	回る写真展



(2) SDGs 推進のための行政、経済団体、企業、NPO 等との連携

▶ 中海テレビ放送と包括連携協力に関する協定を締結(2022年4月)

(株)中海テレビ放送と包括連携協力に関する協定締結調印式を行った。この協定は、本学と中海テレビ放送が地域の情報発信や産業振興、人材育成等多分野で連携し、地域における課題の解決や持続的発展を目指すもの。最初の取り組みとして、学内にデジタルサイネージを設置し、山陰の企業を紹介する動画コンテンツを発信することで、学生の県内就職を促す。



▶ 「天の蛍を見る会」での講演(2022年5月)

鳥取県江府町にて「天の蛍を見る会」が開催され、環境学部 千代西尾祐司 教授の協力により、同町が導入した「テレビ観望」セットのお披露目も行われた。また、千代西尾 教授が「『テレビ観望』のしくみと撮影された天体について」をテーマに講演を行い、「テレビ観望」で使用している技術「プレートソルビング」「ライブスタック」の説明や「テレビ観望」で撮影した天体の数々の紹介があった。会の終盤には「星空観察」として、実際の星空を直接肉眼で見たり、「テレビ観望」や双眼鏡を用いて見たり等、同町の星空の美しさを堪能し、参加者からは、その美しさに歓声があがった。



八頭町とSDGsの推進に関する連携協定締結（2022年6月）

これまで、八頭町と本学は、八東ふるりの森を拠点とし、学生や県内の小・中学生を招いた環境教育等のSDGsの取り組みを実施して来た。それらの成果を踏まえて更に、取り組みを推進することとなり、連携協定を締結した。今後、同様の取り組みを船岡竹林公園や姫路公園等にも広げて行く。



経営学部柳ゼミ生がコミュニティFM（FM鳥取）に出演（2022年7月）

第159回日商簿記検定1級最優秀成績合格者の経営学部柳ゼミ生がコミュニティFMの番組「TOTTORI Free Style Radio 来ました！鳥取の元気人！（提供：鳥取市）」に生出演した。パーソナリティの山下弥生さんとロジャーさんの軽快なトークのもと、本学を受験するに至った経緯、簿記の沼(?)にはまった様子等を明るく話した。



磯野ゼミ共催「智頭七夕まつり」開催（2022年7月）

智頭町観光協会、鳥取大学のゼミ、本学の経営学部磯野誠教授のゼミが共催で、智頭町にて「智頭七夕まつり」を開催した。当日は、町内外から多くの参加があり、初めての試みながら大盛況となった。磯野ゼミはパフォーマンスを含む全体の進行管理とキャンドルナイトを担当。パフォーマンスでは、本学のアカペラ部とダンス部が実演を行った。



公立鳥取環境大学を支援する会定期総会の開催（2022年7月）

公立鳥取環境大学を支援する会の定期総会を本学にて開催した。定期総会の後、江崎信芳 理事長兼学長から挨拶があった。また、学生・教員による活動・研究発表として、環境学部加藤禎久准教授から「インドネシア・バリ島での伝統的緑地の総合的機能評価の研究」報告、加藤ゼミの環境学部3年生から「前期のゼミ活動について」の発表があった。



学生が若桜学園の夏休み学習支援教室にスタッフとして参加（2022年7、8月）

若桜町教育委員会からの要請を受け、本学の学生が若桜学園の児童生徒に対して地域の支援者の皆さんと共に学習支援を行った。若桜町公民館を会場に、午前は小学生、午後は中学生に対して、ドリルや問題集等の宿題のわからないところについて学生スタッフがアドバイスを行った。



鳥取県内高等学校長との意見交換会を開催（2022年8月）

鳥取県内の高等学校の校長先生との意見交換会をオンラインで開催した。意見交換会には県内の高等学校から31校が参加した。



学生がらっきょう援農ボランティア体験ツアーに参加（2022年8月）

本学の学生が、JAグループ鳥取農業労働力支援協議会が主催する砂丘らっきょうの植え付け作業を中心とした「らっきょう援農ボランティア体験ツアー」に参加した。県内で農作業の人手が不足している生産者を支援するだけでなく、地元大学生らを対象に、農業の多様な働き方を提案し、持続的な農業振興の一助にするねらいのもとで開催された。



「あゆ」を守るテグスの設置（2022年10月）

産卵する「あゆ」を狙ってやって来る水鳥のカワウから「あゆ」を守るため、千代川漁業協同組合は、鳥取市叶の千代川にカワウの着水を防ぐためのテグスを設置した。卵から孵化する稚魚を増やすことにより、来年遡上する「あゆ」の数を増やすことが狙い。この取り組みに水生生物の研究を行っている本学の学生が参加した。



セントラルクリスチャンカレッジオブカンザス（アメリカ）との 編入学協定締結（2022 年 10 月）
 本学とセントラルクリスチャンカレッジオブカンザス（以下「CCCK」という。）は、2020 年 12 月に双方の学生の利益と教育プログラムを強化し、文化交流を促進することを目的とし、学部学生の相互派遣を計画、促進、実施するための覚書を締結した。今回更に、両校の間で学生相互派遣について、より詳細な条件等を取りまとめた編入学協定を締結。今後、学生交流と異文化体験を主としたプログラムを実施していく予定。



ミドルベリー大学日本校との学生交流プログラムを実施（2022 年 10 月）

本学は、平成 25 年からミドルベリー大学日本校（本校：米国バーモント州）との学生交流プログラムを実施している。このプログラムでは、ミドルベリー大学日本校の留学生が鳥取県に来県し、本学の学生とともに智頭町を主なフィールドとして林業が抱える問題点と地域の取組について、体験を通じて学びながら、両校学生および地域の方との交流を深めている。智頭町で 7 回目の実施となる今回は、2 日間の日程で両大学の学生が参加した。



経営学部竹内ゼミの学生が地元企業とのコラボレーションで商品開発・実売（2022 年 10 月）

経営学部 竹内由佳 准教授のゼミでは、鳥取県内の農業従事者と連携し、生産品の「こだわり」や「素晴らしさ」をマーケティングの考えを用いて消費者に届けるための活動を行っている。その一環として、八頭町田中農場の「こだわり」味噌を用いた商品開発・販売をサンマート（スーパーマーケット）と共同で実施した。サンマート各店の店頭で味噌を用いた惣菜、弁当、味噌漬肉・魚の試食販売や新米、ドレッシング等の直売会も行った。



科学の甲子園ジュニア全国大会に向けた研修会及び説明会の開催（2022 年 11 月）

第 10 回科学の甲子園ジュニア全国大会に向けた研修会及び説明会が本学において行われ、鳥取県代表として全国大会に出場する東中学校と鳥取大学附属中学校の中学生が参加した。研修会は、情報関係と理科関係の 2 つに分けて行われ、講師を情報関係は、人間形成教育センター 久保奨 准教授が、理科関係は、環境学部 千代西尾祐司 教授が務め、どちらも中学生に分かりやすく丁寧に説明を行った。



宇宙こども教室を開催（2022年11月）

本学学生が企画した宇宙こども教室を八頭町上私都地区福祉施設で開催した。このイベントは、学生有志グループが、子どもたちに宇宙を身近に感じてもらい理科の学習への意欲向上を図ろうと「上私都秋の交流会」に合わせて上私都地区まちづくり委員会と協力し開催した。運営にあたっては、地区住民や八頭町社会福祉協議会の協力があった。日本最大のロケット発射場のある種子島出身の学生から宇宙に関する話を聞いた後、ペットボトルロケットの作成を行い、外の広場に出て発射実験を行った。



岩美町商工会との懇談会を開催（2022年11月）

岩美町商工会と本学との懇談会を岩美むらなかキャンパスで開催し、学生及び教職員が参加した。岩美町からは商工会役員、事務局、町役場職員が参加した。本学の取り組みと商工会で取り組んでいる地域総合振興事業について、それぞれ報告があった。続いて「ばばちゃんの缶詰」を学生が試食した。今回は6種類の試作品の中からみそ味としょうゆ味の2種類が試食用に提供された。最後に意見交換を行った。



サザンクロス大学（オーストラリア）との覚書および留学協定締結（2022年12月）

本学とサザンクロス大学は、協力体制を確立、強化し、相互間での教育・研究の進歩、発展を図るとともに、本学学生に一層充実した留学機会を提供し、語学研修の確実かつ円滑な実施を目指すため、覚書および留学協定を締結した。



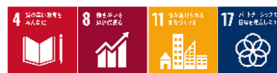
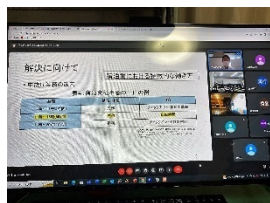
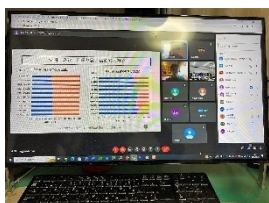
地域連携交流フォーラムを開催（2023年1月）

学生コーディネーターを中心に企画した地域での新たな行動につなげる地域連携交流フォーラム「出会う・繋がる とりキャン」を開催した。本学のサステナビリティ研究所ギャラリー・ホールとまちなかキャンパスの2つの会場をオンラインでつなく方式で実施。サステナビリティ研究所では、八頭町地域おこし協力隊で町内の湿地や水辺の動植物の生物多様性保全活動に取り組む小宮春平さんが、まちなかキャンパスでは、どぶろくを通して地域おこしを行う（株）上代の社長の遠藤みさとさんがゲストとして、それぞれ、現在の取組や取り組みを始めたきっかけ等の話をした。その後、学生コーディネーターが各会場にてファシリテーターを務め、同時並行で参加者によるワークショップを行い、最後にそれぞれの話し合いの成果を発表した。



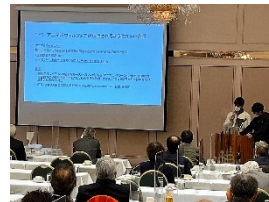
経営学部 佐藤ゼミが「地域課題解決型フィールドワーク」の成果発表（2023年2月）

経営学部 佐藤彩子 准教授のゼミは、鳥取市の（株）Workplays と協働で取り組んできた「地域課題解決型フィールドワーク」に関する成果を、岩美高等学校の生徒とその関係者、鳥取県教育委員会関係者の前で発表した。ゼミ生は、2グループに分かれ、Aグループは「鳥取県宿泊業（旅館）の現状と課題～鳥取県の宿泊客を増やすには～」と題し、鳥取県を対象にコロナ禍前後での観光客の推移等の既存統計を用いて全国との比較を行った。続いて、Bグループは「鳥取県における宿泊業の労働環境から見える課題と現状」と題し、既存統計を用いて宿泊業従事者の賃金や有給取得率等を他産業と比較し、宿泊業の労働条件が悪いがゆえに労働力不足が深刻であることを明らかにした。



産学官連携に関する懇談会の開催（2023年2月）

「公立鳥取環境大学を支援する会」と「鳥取市」、「本学」が共催する「令和4年度公立鳥取環境大学との産学官連携に関する懇談会」を鳥取市内のホテルで開催した。主催者として、支援する会長、市長、江崎信芳 理事長兼学長から挨拶が、続いて、鳥取県子育て・人材局の来賓挨拶があった。今回の懇談会では、第19回環大コンペの環境部門第1位から第3位までと社会部門第1位から第3位までの表彰の後、環境部門と社会部門の第1位が発表を行った。次に、経営学部 高井亨 准教授のゼミ生の発表と高井 准教授からの研究報告があった。



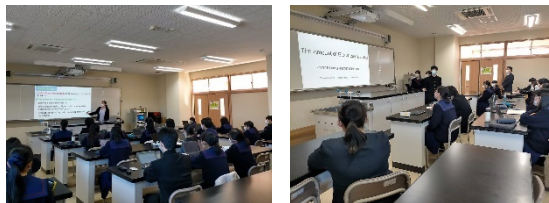
まちなかキャンパスでHUG体験会を開催（2023年2月）

まちなかキャンパスにおいて、鳥取大学の学生団体「鳥大防災Lab」の協力を得て、HUG体験会を開催した。HUGとは、H（避難所）U（運営）G（ゲーム）のことで、災害が起きた時にどうするのか、どうなるのかを考えるゲーム。約1時間のゲーム終了後、参加者同士でゲームについて意見交換を行った。



米子東高等学校で SDGs ワークショップ（英語版）の実施（2023 年 2 月）

環境学部 甲田紫乃 講師が、米子東高等学校で SDGs ワークショップを実施した。このワークショップは、米子東高等学校の生徒会執行部が「SDGs（特に環境教育）に関する勉強会」として企画したもので、このことに造詣が深い甲田 講師が招かれた。更に、英語学習の実践の機会とも捉え、講義や発表を全て英語で行った。参加者（1～3 年）は、昨年末にも甲田 講師の講義を受けており、前回学んだ内容も踏まえて自分達なりの SDGs の取り組みを考え、発表を行った。



鳥取商工会議所工業部会との SDGs 連携事業

- SDGs の取り組み推進を目的に鳥取商工会議所工業部会と本学の教員及び学生が連携し、工業部会員企業の環境分野等における課題解決に取り組んでいる。この課題解決を通じて、本学では SDGs の目標達成並びに学生の成長を目指す。

マルサンアイ鳥取（株）の豆乳おからの課題解決

豆乳製造には、おからの排出（年間約 8,220 トン（毎年増加している））及びその処理の課題（腐りやすい、処理（廃棄）に伴う輸送費（コストが掛かる）等）がある。本年度、その課題解決のため環境学部 門木秀幸 准教授とそのゼミ生は「おからの乳酸発酵による再資源化に関する研究」を行った。そのなかで、おからの pH 調整や乳酸発酵により保存性の改善や軽量化（コスト減）を狙った。また、おからを L-乳酸発酵させ付加価値の高い生分解性プラスチック原料とする試みも実施した。更に、おからを豆腐の原料に活用する試作も行った。



菌興椎茸協同組合の発泡スチロールフタの課題解決

椎茸種菌（椎茸の形成菌等を固めたもの）には、そのフタに発泡スチロールが使われており、栽培地で発泡スチロールがゴミとして散乱し、やがてマイクロプラスチックの問題につながる恐れがある。本年度、その課題解決のため環境学部 金相烈 教授とそのゼミ生は「しいたけ形成菌フタ材に用いる生分解性プラスチックの自然環境における変性原因に関する研究」と「しいたけ形成菌のフタ材における生分解性プラスチックの耐水性の向上に関する研究」を行った。そのなかで、天然物質であるキトサンを発泡スチロールの代わりにフタ素材とすることや自然環境下でもフタとして機能させるため耐水性を向上させること等を研究した。同様に、本年度、同課題解決のため門木ゼミ生は「発泡 PLA を用いた椎茸形成菌の実用化」の研究を行っ

た。そのなかで、発泡PLA（ポリ乳酸）をフタ素材することや自然環境中での分解試験等を行った。



(株)LIMNO(旧:三洋テクノソリューションズ鳥取(株))の地域貢献活動
 LIMNOでは「SDGsの観点からの新商品づくり(食による健康、食材廃棄ロス削減、ジェンダーレス社会の実現)」をテーマにした地域貢献活動(課題解決)として学生有志が取り組んだ。
 2022年7月、同社にてSDGs連携事業地域貢献活動開始式を行い、その後1回目の打ち合わせを実施した。「食品の賞味期限」「ゴミの分別」の2つを検討することになった。同月、同社にて2回目の打ち合わせを実施。「ゴミの分別」で検討を進めることが決まり”生ごみを乾燥させる商品(サブスク)”を考えることになった。8月、同社にて3回目の打ち合わせを実施。9月の同社役員等の前でのプレゼンに向けた意見、要望、助言を受けた。9月、同社にて4回目5回目の打ち合わせを実施。プレゼン資料のブラッシュアップ及びプレゼンのリハーサルを行った。9月22日に同社役員等に対するプレゼン(商品企画提案)を実施し、取り組みを終えた。



令和4年度報告会(2023年2月)
 令和4年度の事業総括として進捗状況及び成果等を広く共有するために報告会を開催した。
 会場:鳥取商工会議所大会議室 会場参加者を限定し、YouTubeライブ配信実施。
 概要:挨拶、事業趣旨説明、

- 令和4年度取組報告
 - マルサンアイ鳥取 - 発表者:門木ゼミ
 - 菌興椎茸協同組合 - 発表者:金ゼミ、門木ゼミ
 - LIMNO - 発表者:学生有志
- 令和5年度取組
 - 対象企業:(株)アサヒメッキ - 担当者:門木ゼミ
 - 課題:再生水循環システムの正常稼働



第9回とっとり麒麟地域活性化プラットフォーム地域連携推進会議をオンライン開催(2023年3月) Web会議システムを用いて、第9回とっとり麒麟地域活性化プラットフォーム地域連携推進会議を開催した(本学を含む14団体が参加)。小林朋道 会長(副学長)の挨拶の後、議長を吉永郁生 地域イノベーション研究センター長が務め議事を進めた。(株)週末住人の代表から活動報告、本学の地域連携コーディネーターからプラットフォームの取組や産官学連携の取組報告があった。次に、吉永センター長から本学の副専攻制度、特に「地域実践」特別演習の実施状況等について報告があった。最後に、研究交流推進課長から本学の就職活動状況や入試実施状況等の報告を行った。



(3) 地域住民向けのSDGsの情報提供及び地域住民と教員及び学生等が議論を行う場の提供

SDGs 地域塾の実施(環境学部)

SDGsに関わる地域課題について、学生と地域住民等が対面して課題を共有し、考え、互いに気付きを得るための意見交換の場。SDGs達成に向けた取組み推進と地域課題の解決に貢献することを目的とし、以下のとおり実施した。

因習和紙の生産体験と販路拡大に関する意見交換(2022年8月)

概要: 青谷町の手漉き和紙職人と環境学部 山口創 講師のゼミが和紙の伝統的な原料であるコウゾのみを使った手漉き和紙の生産体験と販路拡大に関する意見交換を行った。和紙職人の指導のもとコウゾ煮熟、塵取り作業等の紙漉きの事前準備、紙漉き作業等を生産体験。意見交換では、コウゾの前処理の程度によって紙の風合いが異なるため、この風合いを生かした商品を開発できないかといったことや、販路拡大には、まずは生産者側が認識する和紙の良さを消費者側がどのように捉えているのかを調査する必要があるのではないかといったこと等の意見が出された。



鳥取ブルーカーボンプロジェクト「海のごちそう祭」への参加(2022年9月)

概要: 藻場は、水産生物の生産の場として重要な役割を果たしているだけでなく、近年は二酸化炭素の吸収源としての役割(ブルーカーボン機能)も注目されている。一方、近年、鳥取県沿岸の藻場が荒廃しはじめていと言われており、海藻を食べるムラサキウニの増加が原因の一つと考えられている。このような藻場の現状と課題を鳥取県民に広く知ってもらうため、鳥取市賀露町にある鳥取県漁業協同組合の市場上屋で同組合が主催する「海のごちそう祭」が開催された。この祭りに、環境学部 太田太郎 准教授のゼミが参加し、イベントスタッフ等として活動した。

- ・太田 研究室が「鳥取の豊かな海の再生応援団」に認定。
- ・ステージイベント(トークショー)に太田 准教授が参加。
- ・ワークショップコーナーに「海藻ハーバリウムづくり」を出展。



若桜町の在来えごまの生産活動と商品化に関する意見交換（2022年10、11月）

概要：環境学部 山口創 講師のゼミが若桜農林振興、八頭普及所、若桜町役場らと取り組む若桜町の在来エゴマの商品開発活動の一環として、在来エゴマの収穫・脱穀体験と新たな商品の開発に向けて意見交換を行った。10月は、収穫作業を行い、作業にあたり宮本普及主幹から若桜の在来エゴマは茎が赤くなる特徴があり、この特徴が表れていない個体は別品種が交雑している可能性があるため品種保全の観点から廃棄する必要があるとの説明があった。この点に注意しながら収穫した。11月は、ビニールハウスにて乾燥させていたエゴマの脱穀作業を昔ながらの唐箕を使い実施。その後の意見交換では、学生が考案したエゴマ商品（ラー油やふりかけ）について報告がおこなわれ、今後の消費者調査の実施などについて話し合った。



SDGs カフェの実施（経営学部）

気軽に語り合えるカフェ形式で、設定したテーマについて参加者が自由に意見交換する場。学生主体で企画・運営し、以下のとおり実施した。

①災害と人権～命を守る避難所とは～（2022年6月）

概要：災害発生時に避難場所等で起こる数々の問題や、様々な人権問題。災害被害の軽減は「自助・共助・公助」の効率的な組み合わせで実現できる。これらのことを理解することにより日頃からの防災について十分に意識し、一定の知識・技術を持ち、地域における防災リーダーとして、総合的な防災力向上の中心となって活動するきっかけづくりとして「TUES 地球環境を考える会」が企画し実施した。



②世界の食料問題と昆虫食（2022年10月）

概要：エントモファジー:Entomophagy とは昆虫食のことで、近年国際的に食糧不足が叫ばれるなか、注目されつつある食文化の一つ。昆虫食を通じて世界の食糧問題を考え・話し合うとともに、試食等で昆虫食にふれるきっかけをつくった。



令和3年度研究成果報告会の開催（2022年9月）

サステナビリティ研究所と地域イノベーション研究センターの研究者による令和3年度研究成果報告会を共同開催した。この報告会では、サステナビリティ研究所及び地域イノベーション研究センターの研究者が、それぞれの専門分野から持続可能な社会や地域課題の解決につながる研究成果の報告を行った。

開催形式：2会場対面・オンラインによるハイブリット

テーマ：サステナブルな地域社会を創る～環境学・経営学の視点から～

プログラム：

<第1会場（地域イノベーション研究センター）>

開会の挨拶	吉永郁生 センター長（環境学部教授）	
報告1	山本敦史 研究員 （環境学部准教授）	食のみやこ鳥取づくり連携支援計画に基づく地域事業者との価値共創～生産者・消費者の科学的根拠の相互理解を踏まえた地域食材の価値向上～
報告2	竹内由佳 研究員 （経営学部准教授）	プロジェクト・ヘルシュによる鳥取県の農産物マーケティング支援 食のみやこ鳥取づくり連携支援計画に基づく地域事業者との価値共創
報告3	角野貴信 研究員 （環境学部准教授）	有機質資材連用年数が水田土壌中の窒素含量及び水稲による窒素吸収量に与える影響
報告4	甲田紫乃 研究員 （環境学部講師）	環境教育活動を主軸とした地域活性化の活動に関するアクションリサーチ 「八東ふるさとの森」における産官学の取り組みに関する事例研究
報告5	磯野誠 研究員 （経営学部教授）	バックキャストिंगにおけるビジョンの質と創造性発揮の動機づけとの関係
報告6	太田太郎 研究員 （環境学部准教授）	千代川水系における魚類生息環境調査について
報告7	千代西尾祐司 研究員 （環境学部教授）	天体電視観望機器を用いた、地域貢献としての学生ボランティアの関わり方の開発
閉会の挨拶	倉持裕彌 副センター長（経営学部准教授）	

<第2会場（サステナビリティ研究所）>

開会の挨拶	田島正喜 所長（環境学部教授）	
報告1	倉持裕彌 研究員 （経営学部准教授）	買い物支援としての公営スーパーに関する事例研究
報告2	山口創 研究員 （環境学部講師）	中山間地域における高齢者の移動実態と共助交通の利用意向
報告3	佐藤彩子 研究員 （経営学部准教授）	「介護」の特定技能1号外国人の受入実態と課題 大都市圏集中傾向に焦点をあてて
報告4	戸効丈仁 研究員 （環境学部准教授）	マイクロ波照射非熱的作用によるメタン発酵への影響
報告5	門木秀幸 研究員 （環境学部准教授）	産業廃棄物の有害性判定のための溶出試験における六価クロム分析技術の開発
報告6	佐藤伸 研究員 （環境学部准教授）	ゴム・木粉複合再生ゴム材料の開発

報告 7	中尾悠利子 研究員 (関西大学 総合情報学部准教授)	中小企業における創発型責任経営の実践 鳥取県内企業を対象として
閉会の挨拶	佐藤彩子 副所長 (経営学部准教授)	
事前録画配信	俞成華 研究員 (経営学部教授)	鳥取県中小製造企業における若年者人材の育成と活用

サステナビリティ研究所、地域イノベーション研究センター共に、報告の元となった論文等を纏めた事業報告書を発刊し、当日の参加者及びステークホルダー等に配布。



学術講演会の開催 (2022年10月)

サステナビリティ研究所主催の学術講演会を開催した。

テーマ: ウクライナ避難民の支援と人類社会の未来像 (中間報告)

主催: サステナビリティ研究所

会場: 県民ふれあい会館5階講義室

プログラム:

内容	タイトル等	発表者等
開会挨拶		田島正喜 所長 (環境学部教授)
講演 1	避難民の「居場所」を読み解くー過疎地を前向きにとらえるために (中間報告)	浅川滋男 環境学部教授
講演 2	1986年のチェルノブイリ事故による環境影響 ～ウクライナ生態学・自然資源省のデータから～	角野貴信 環境学部准教授 エア・マトベージェリ 研究員 (※1)
質疑応答		マリーナ・ピロバ (北条ワイン醸造所、(※1))
		ボリス・アフナセフ (SAMI JAPAN 出雲、(※2))
		キル・サブラフ (同上)
		磯野誠 経営学部教授 (司会)
閉会挨拶		佐藤彩子 副所長 (経営学部准教授)

(※1) ウクライナ出身、(※2) ロシア出身



SDGs オンライン講座

本学のSDGs取組宣言の理念にある「持続可能な社会」を実現するため、本学の有する教育リソースをオンラインで視聴可能な講座(動画コンテンツ)として提供するもの。そのことにより、高校生及びその学校並びにステークホルダー等の持続可能な社会の発展に関する知識向上と意識改革を図る。2022年度は9本の動画コンテンツを制作、公開。

【2022年度制作】

サステナビリティ研究所 提供 (「SDGs基礎」ダイジェスト版)

テーマ、タイトル等	講師氏名等
実践から考えるSDGs	環境学部 甲田紫乃 講師
SDGsとマーケティング	経営学部 竹内由佳 准教授

グルメコーヒーは世界を変える	環境学部 佐藤伸 准教授
SDGs の来た道	経営学部 相川泰 教授
持続可能なファッションとは何か？ とっとり SDGs Eye！ 提供	経営学部 連宜萍 准教授
テーマ、タイトル等	講師氏名等
生物ゲノムから環境を知る	環境学部 吉永郁生 教授
フィールドとモデルの両方から、土壌の持続性を明らかにする	環境学部 角野貴信 准教授
自分事として「働きがい」を考える	経営学部 島田善道 准教授
SDGs と DX	経営学部 齊藤哲 教授

SDGs オンライン講座は、本学 YouTube 公式チャンネルで視聴可能。



環境学部 佐藤伸 准教授に日本海テレビの取材（2022年9月）

環境学部の佐藤伸 准教授が『ニュース every 日本海』の取材を受けた。番組では「SDGs ウィーク」と題して、山陰両県の様々な取り組みを番組内で取り上げた。そのなかで、佐藤伸 准教授は「キノコの作用を活かした社会貢献」として、キノコによるゴムの分解、再資源化について話をした。



環境学部 太田太郎 准教授にNHKの取材（2022年10月）

環境学部の太田太郎 准教授とゼミ生が鳥取県・島根県のNHKで放送される『「さんいんスペシャル」海底で事件です！～ムラサキウニの大量発生に挑む～』の取材を受けた。収録では太田ゼミ生がウニの体の仕組み等について実験を交えて紹介した。また、太田 准教授はウニが藻場に与える影響について、番組ディレクターからの質問に回答した。



KAN ラジの収録を実施（2022年10月）

第4回 KAN ラジの収録をFM鳥取(RADIO BIRD)のスタジオで行った。KAN ラジは、本学の研究者がFM鳥取のラジオパーソナリティと一緒に専門分野や研究生活についてのトークをお送りする「気軽に学べるラジオ番組」。第4回の出演は、環境学部 角野貴信 准教授とウクライナから避難し本学で研究を続けている研究員のユリア・メドベージェワさん。収録では、角野 准教授とメドベージェワさんが「土壌」の世界に足を踏み入れたそれぞれの経緯や研究者としての注目ポイントをはじめ「『土の皇帝』と呼ばれるほどのウクライナの土とは？」「土に『疲れ』が見え始めているというのは、どういったことなのか？」等といった様々なトピックについてトークを展開した。



KAN ラジは、本学 YouTube 公式チャンネルで視聴可能。



環境学部の教員と学生に中海テレビ放送の取材（2022年11月）

環境学部 金相烈 教授と門木秀幸 准教授、佐藤伸 准教授、学生が中海テレビ放送の『Road to 2030 ~SDGsで考えるふるさとのミライ~「目指せサステナブルな社会」2022年11月放送』の取材を受けた。番組内にて、金 教授と門木 准教授、それぞれのゼミ生は、鳥取商工会議所工業部会とのSDGs連携事業について、佐藤 准教授は、ゴムを分解するキノコの性質等についてインタビューを受けた。



環境学部 門木秀幸 准教授と学生にTUFテレビ福島の取材（2023年2月）

環境学部の門木秀幸准教授とゼミ生がTUFテレビ福島の「Dream Journey～夢をつむぐ旅～ 2023年3月放送」の取材を受けた。番組内で、門木 准教授とゼミ生は、鳥取商工会議所工業部会とのSDGs連携事業において取り組んでいる「おからの乳酸発酵による再資源化に関する研究」と「発泡PLAを用いた椎茸形成菌の実用化に関する研究」についてインタビューを受けた。



鳥取県が開設しているポータルサイト「とっとりSDGs」に「とっとりSDGsパートナー」として、本学の「SDGsに関する取組」を継続して掲載した。



4. 広報活動・情報発信

(1) 本学Webサイト、大学案内等で本学のSDGsの取組や学生等活動を掲載

外部への発信・普及啓発を目的に、本学公式Webサイト上に開設したSDGs特設ページ（公式Webサイトのトップページにバナーを設け、大学PRにも活用）にSDGsに関連する活動のレポート等を継続して掲載。

図書館に設置しているSDGsコーナーを継続。学生及び一般利用者への情報提供を充実。



(2) 本学主催 SDGs イベントの広報物(チラシ等)へ SDGs のロゴ、アイコンを使用

本学が主催する SDGs を含む様々なイベント等の広報物に SDGs のロゴ、アイコンを使用し SDGs の普及を推進した。



(3) 学生等の SDGs への関心を高めるための積極的な情報発信

「1. 教育」「2. 研究」「3. 地域貢献・地域連携」「4. 広報活動・情報発信」「5. 大学運営等」におけるイベント等を介して、学生含む教職員及び一般の方等に SDGs に関する積極的な情報発信を継続して行い、SDGs への関心を高めた。



5. 大学運営等

(1) EMS と SDGs とを関連付けし、PDCA サイクルを活用することによる目標の達成

本学は、2003年2月に国際規格の環境マネジメントシステム ISO14001 を認証取得し、2018年2月まで15年間、認証を継続して来た。更に、2019年6月に鳥取県版環境管理システム TEAS I 種:2018 を認証取得し、3年間環境保全活動に努めた。環境マネジメントシステム認証取得から18年が経過した現在、環境マネジメントシステムを外部審査に頼ることなく、自主的に運用できる水準に達したと判断するに至り、ISO14001:2015の「自己適合宣言」を行った。



環境目標・実施計画に SDGs に関する目標を設定し SDGs を日常業務として継続。環境マネジメントシステムの有効性及び各実行組織が定める環境目標・実施計画の達成状況を確認し、必要に応じてその改善を図ることを目的に、内部監査を実施・継続した。

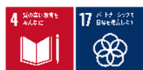


(2) 多様な学生支援を行うことにより「誰一人取り残さない」ように努める

「授業料減免等による経済的支援」や「日本人学生による留学生の生活支援(外国人留学生サポーター)」「学生の健康相談、メンタルヘルス相談等健康支援」「ハラスメント相談」等を継続して実施した。



「スチューデント・commons」を継続。「スチューデント・commons」とは、学生同士の学びの交流と相互啓発を促進する場で、個人学修やグループワーク、休憩、相談のスペースを設けている。



抗原定性検査を実施（2022年4月）

全国的に若者の新型コロナウイルスの感染者が増えているなか、4月の入学式及び新学期の始まりにあわせ、県外から多くの学生が移動してきた。そのため感染拡大防止策の一環としてフレッシュャーズセミナー、ガイダンスにあわせ、全学生を対象に学内で抗原定性検査を実施した。



ウクライナからの避難民受け入れ（2022年6月）

ウクライナからの避難民を外国人研究者として受け入れた。ウクライナ現地の状況から大学院での研究の継続が難しく、本人から研究の継続の希望があり、本学の担当教員のもとで安心して研究を継続できる環境を提供した。



学友会との意見交換（2022年12月）

学友会(学生自治組織)と大学との意見交換会を実施した。学友会が学生から大学への意見を集約し、代表して学長、副理事長、副学長、事務局長と意見交換を行った。学友会にとっては学生が学生生活の中で困っていることや大学への要望の声を直接大学運営層へ届ける場であり、大学運営層にとっては学生の現状を直接聞く場であり、双方にとって貴重な場となった。



(3) 教職員等に対するSDGs啓発、研修等の実施

「1. 教育」「2. 研究」「3. 地域貢献・地域連携」「4. 広報活動・情報発信」「5. 大学運営等」におけるイベント等を通じて、教職員等に対するSDGs啓発、研修等を継続して実施した。



以上